



「変わりゆく酪農」



酪農経営：十日町市大字東下組 水落 岳人氏

私が酪農を始めて二十数年が過ぎました。振り返ってみると牛の飼い方もずいぶん変わったものだと思います。酪農を始めた当時粗飼料といえば、夏には田の畦草を刈ってきて与え、秋には一年分の稲わらを一所懸命集めたものですが、今ではほとんどを輸入乾草で賄っています。今考えると稲わらでよく乳が搾れたと不思議な気がしますが、当時はそれが普通の飼い方でした。飼養管理のやり方も搾乳のやり方も、二十年前に比べるとずいぶん変わってきているように思います。個体乳量が年々増えていくのは嬉しいことですが、それに伴って管理が難しくなっていくので大変です。

少しでも経営が良くなる様にと、私も新しい技術を取り入れるように、努力をしています。上手にいくことも多いのですが、今一の結果で止めてしまうことも時にはあります。しかし、本当のところはやってみないと解らないことが多いので、決して無駄な努力では無いと思っていますし、新しいことを試みるのは、一つの楽しみでもあります。最近特に環境改善に力を入れているところですが、試行錯誤の連続でなかなかベストの形が見えてこないのが現状です。完璧を求めず、少しずつでも良くなっていくよう気長にやるしかないと感じるようになりました。

現在の酪農を取り巻く状況は決して良いとはいえません。特に最近、乳質の問題や排せつ物処理の問題等もあり、頭を悩ませることが多くなっています。そんな中頑張っている農家の苦勞が少しでも報われるように、収入が増えて元気が出るような時代が来ないかとか、もう少しゆとりを持った経営ができる時代が来ないかと自問自答しながら期待しているところです。

「毎日が試行錯誤」



養豚経営：神林村大字牧ノ目 増田 英子氏

「英子さん、この豚がお金に見える様になったら養豚農家の母ちゃんとして一人前だなあ」と今から20年前農業についたばかりの私に夫の叔父が言いました。しかし、20年も過ぎたと言うのに今だに、やはり「豚は豚にしか見えません」まだまだ未熟者の私です。それでもたまたま、出荷した後の空豚房や残っている豚の数が少なくなるのを見ると心細くなり、満杯になった豚房を見ると心豊になるのです。「これって、豚がお金に見えて来たと言うことでしょうか？」さて、我が家は、母豚50頭の一貫経営と稲作の複合経営ですが、豚舎は家から離れた砂丘地内にあり、ふん尿処理は土地還元を行ってきました。しかし、ここに来て環境問題が厳しく言われるようになり、また我が家の豚舎の近くに森林公園や遊歩道ができたりしたことで畜舎周辺の環境整備にも配慮しなければならなくなりました。このようなことから、尿処理については、思い切って機械による浄化処理の道を選択致しました。夫もずいぶん悩みました。これから多額の投資を行い浄化槽を設置すべきか、はたまた、ここできっぱり養豚を止めてしまうのか二者択一の道に迫られました。私達夫婦の年齢も40歳後半となり、勤めに出るにしても中途半端な年齢で、また家庭内では、これから一番お金の掛かる4人の子供を抱えている現状では無理もできません。最後の決断として「養豚も大変だが、勤めに出るよりは…」と経営の継続を決心し、浄化槽の設置に踏み切りました。浄化槽は今年の12月より本格的に稼働し、お蔭で尿処理の悩みからは解放されました。「これからは、もっと頑張らなくてはい」と思いきや年が明けて今年度は低豚価に悩まされています。思えば、毎年毎年これで良かったと言える様な満足な成果の年はありません。いつまでも地に足がついていない様な状態ですが、それでも、昨年よりは今年、今年よりは来年と試行錯誤を繰り返しながら納得のいく経営に少しずつ近づけて行ける様、夫と共に頑張っています。

「体さえ健康で丈夫であれば何でも出来る」を合言葉にしています。先日末っ子の中2の息子が「農家の長男として」と題して、校内代表で村内の主張コンクールに参加しました。「豚の仕事は継がなくとも良いよ！」と常に言っているものの継ぐ継がないは別として、一時でも親の仕事について真剣に考えてくれたかと思うととっても嬉しかったです。そして「この子のために土台をしっかり作っておいてあげたら良いのかな？」なんて、ついつい思ったりしている今日この頃です。